青雲寺周辺の文化財群（白岡遺産ストーリー２から抜粋）

地域の文化財を地域の手で守る

木造阿弥陀如来坐像

企画制作：白岡遺産保存活用市民会議
監修：白岡市教育委員会教育部生涯学習課文化財保護担当
協力：青雲寺
〒349-0292　白岡市千駄野 432
白岡市教育委員会教育部生涯学習課
電話　0480-92-1111 内線 522
E-mail：syougaigakusyuu@city.shiraoka.lg.jp
URL: www.city.shiraoka.lg.jp/kanko_bunka_sports/rekishi_bunkazai/index.html

白岡市指定文化財

木造阿弥陀如来坐像

青雲寺・白岡市教育委員会
・白岡遺産保存活用市民会議

木造阿弥陀如来坐像

本像は、胸前で説法印（下品中生印）を結ぶ坐像です。

寄木造で、指先などにわずかな欠失が認められるほか、部分的に後世の修理の手が加えられていますが、像の主要部は造立当初の姿をよく留めています。

像の各部の特徴から藤原時代後半の院政期頃の定朝様彫刻の特徴をよく表しています。さらに、像全体の造形や構造などから１２世紀末葉頃の製作と判断されます。

整美端麗な作風から中央仏師系の人物による造仏と考えられ、白岡市はもとより県東部を代表する平安仏の事例として文化財的価値の高い発見となりました。

青雲寺住職によれば、本像は、元は篠津須賀神社付近に所在した「西光院」というお堂に安置されていたものが、青雲寺に近接して所在した阿弥陀堂に移され、廃寺に伴って移されたものではないかといいます。

【法量】

像　高：108.5 ㎝、膝　張：87.2 ㎝、裾　奥：72.0 ㎝

台座高：31.4 ㎝、台座幅：99.0 ㎝

【保存状態】

両耳輪部分後補の手が入るヵ。

頭部肉髻部を中心に後補の手が加わるヵ。

左手第三指先第五指先欠損。

右手第三指指先を欠損。

木造阿弥陀如来坐像と鬼窪氏

本像が篠津地区に残された背景には、鎌倉時代、室町時代に白岡周辺に拠点を置いた有力武士団である野与党鬼窪氏の存在が大きいものと考えられます。

鬼窪氏が最初に土着した場所は、篠津久伊豆神社の周辺であると伝えられてきました。同社の康治元年（１１４２）創建という社伝と本像の造像年代観に大きな開きがないことも、この伝承を補強するものと考えてよいでしょう。

当時の篠津は、台地の西側に現在の元荒川（当時は星川・野通川の乱流帯）、東側に日川（旧利根川の本流筋のひとつ）という２本の大河を擁する河川交通の要衝でした。

篠津久伊豆神社周辺に展開する中妻遺跡では、奈良時代に遡りうる鍛冶工房跡が見つかっており、砂鉄をもとにした製鉄が行われていたことがわかっています。原料の砂鉄は前述の２つの大河がもたらしたものとみてよいでしょう。

また、中妻遺跡をはじめ、神山興善寺遺跡、白岡地区内の入耕地遺跡で中世の館跡の所在が明らかとなっており、いずれも鬼窪氏ゆかりの居館と考えられます。

鬼窪氏は、物流（河川交通）と先端技術（鉄）だけでなく、田畑を拓き、文化を根付かせました。篠津村の村高（コメの生産量）は江戸時代を迎えたとき、既に 1,000 石を超えており、中世期にしっかりとした開発が行われていたことがわかりますし、今回発見された木造阿弥陀如来坐像のほか神山興善寺遺跡出土の金銅仏、興善寺の中世石造物群などから、仏教文化が根付いていたこともうかがわれ、鬼窪氏の影響の大きさが感じられます。